Osaka University Knowledge Archive

Title	住民と大学院生の協働によるまちづくり活動の展開 : 島根県隠岐の島町での活動報告
Author(s)	島田, 広之; 田尾, 俊輔; 小島, 晋一郎 他
Citation	Co＊Design. 2020, 8, p. 49-74
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/77267
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

住民と大学院生の協働によるまちづくり活動の展開
―島根県隠岐の島町での活動報告―[1)]

島田広之（大阪大学大学院　文学研究科　修士課程）
田尾俊輔（大阪大学大学院　言語文化研究科　博士前期課程）
小島晋一郎（大阪大学大学院　理学研究科　博士前期課程）
中野将（大阪大学大学院　工学研究科　博士前期課程）
岩泉達也（大阪大学大学院　人間科学研究科　博士前期課程）

Community Development through Cooperation between Inhabitants and Graduate Students
―A Report on Our Activities in Okinoshima Town, Shimane Prefecture―

Hiroyuki Shimada (Master's Course, Graduate School of Letters, Osaka University)
Shunsuke Tao (Master's Course, Graduate School of Language and Culture, Osaka University)
Shin-ichiro Kojima (Master's Course, Graduate School of Science, Osaka University)
Sho Nakano (Master's Course, Graduate School of Engineering, Osaka University)
Tatsuya Iwaizumi (Master's Course, Graduate School of Human Sciences, Osaka University)

筆者らは、2019年度から島根県隠岐郡隠岐の島町をフィールドにして、当該地域の社会課題解決に向けた活動を展開している。近年、隠岐の島町が抱える問題に人口減少があり、特に若者の流出が顕著である。そこから生じ得る様々な社会課題に対処するために、社会的ネットワークを資本と捉えるソーシャル・キャピタル論（Putnam 2000 = 2006）やよそ者効果（敷田 2005、2009）、まちづくりラウンドテーブル（久 n.d.）の研究に加えて、現地でのフィールドワークや住民との対話から得られた情報を踏まえ、課題が持続的に解決されて新たなアイデアが次々に創出される理想状態へと向かうロードマップを作成した。まずは、第一段階である全体的な地域の活力の向上を目指して、住民と協働しながら、高校生から大学院生への質問会や、課題解決の場としてのワークショップ、高校と大学の合同研究発表会・座談会を開催した。また、継続的に実施するワークショップで出されたアイデアのうち、島内外のボランティアによる中学生対象の学習塾の開催を実現した。そして、これらの活動を通して、現地における大学院生としての筆者らの存在意義を再考するとともに、上述の諸理論へのフィードバック可能性を指摘した。

キーワード ―― まちづくり、ソーシャル・キャピタル、ワークショップ、隠岐の島町
Keyword ―― community development, Social Capital, workshop, Okinoshima Town

We have conducted several activities to tackle social problems in Okinoshima Town, Shimane Prefecture, Japan since 2019. This town has recently faced population decreasing, especially a great drain on young people. In order to attack problems caused by such a situation, the authors have gotten information from not only previous studies including Social Capital (Putnam, 2000=2006), which regards social network as capital, Outsider Effects (Shikida, 2005; 2009), and Machizukuri Round Table (Hisa, n.d.) but also our fieldwork and communication in the town. These investigations gave us a roadmap to an ideal situation where people continuously solve social problems and come up with a series of new ideas. As a first step, the inhabitants and authors decided to improve the whole vitality of the town. We have created opportunities for high-school students to ask graduate students, held workshops as a place to discuss the town's problems, and had a study meeting and symposium jointly promoted by Oki High School and Osaka University. Furthermore, one of the ideas from the workshops, voluntary juku for junior-high-school students, has been realized. Lastly, we have evaluated our roles as graduate students in Okinoshima Town and pointed out some possibility of theoretical feedback from these activities.

1 はじめに

都市部への人口集中や少子高齢化の進行に伴う生産年齢人口の減少により、都市部から離れた地方に位置する地域が様々な社会課題に直面していることは、現代の諸問題の一つであろう[2)]。とりわけ、離島はその地理的要因から周辺地域との物理的なつながりが希薄になりがちであり、地方が抱えている一般的な社会課題に加えて、離島に特有の社会課題も存在すると考えられる。よって、離島の現状を考察して適切なアクションを起こすことは、その地域の課題解決につながるだけではなく、他の地域の様々な課題に取り組む際に役立つ新たな視座や知見をもたらす可能性がある。

また、筆者らは大阪大学超域イノベーション博士課程プログラム（以下、超域プログラムと示す）に所属しており、そこでは社会と知を結びつけることによって現代の複雑な社会課題に向き合うために、高度な専門力に加えて、多様な視座や経験、汎用力を備えた新時代の博士人材を育成することが目指されている（山崎ほか 2016）。その目標を達成するために、超域プログラムでは、異分野の大学院生が協働して、現実社会の課題に基づくPBL（Project-Based LearningあるいはProblem-Based Learning）[3)]に取り組む（松村 2018）。しかしながら、提供されている授業の範囲内において、履修生らが自ら主体的にフィールドや課題を発見し、なおかつ責任を持って一つの活動の全プロセスに携われるような機会はほとんどない。そこで、活動全体を俯瞰しながら、（1）超域プログラムでの学修内容と（2）筆者ら各々の専門性、（3）筆者らが選定したフィールドおよび課題という三者間の距離感をうまく調整する。その上で、超域プログラムの授業での学びとリアルな実践を行き来させることを通して確かな力を

定着させていくとともに、ステークホルダーと協働して試行錯誤を繰り返しながらも責任感を持って徹頭徹尾課題に取り組むという、大学の授業では扱われにくい、現実世界に即した過程を積み重ねる。このような流れが上述した超域プログラムの目標を真に達成するためには必要なのではないかと思われる。

このような背景を受けて、筆者らは2019年から島根県隠岐の島町をフィールドに設定して活動を行ってきた。本稿は、2019年度の活動に関するまとめと考察を記したものである。考察部分では、特に「大学院生による、お互いの専門分野を超えたまちづくりにはどのような意義があるのか」という問いについて検討していくことにする。

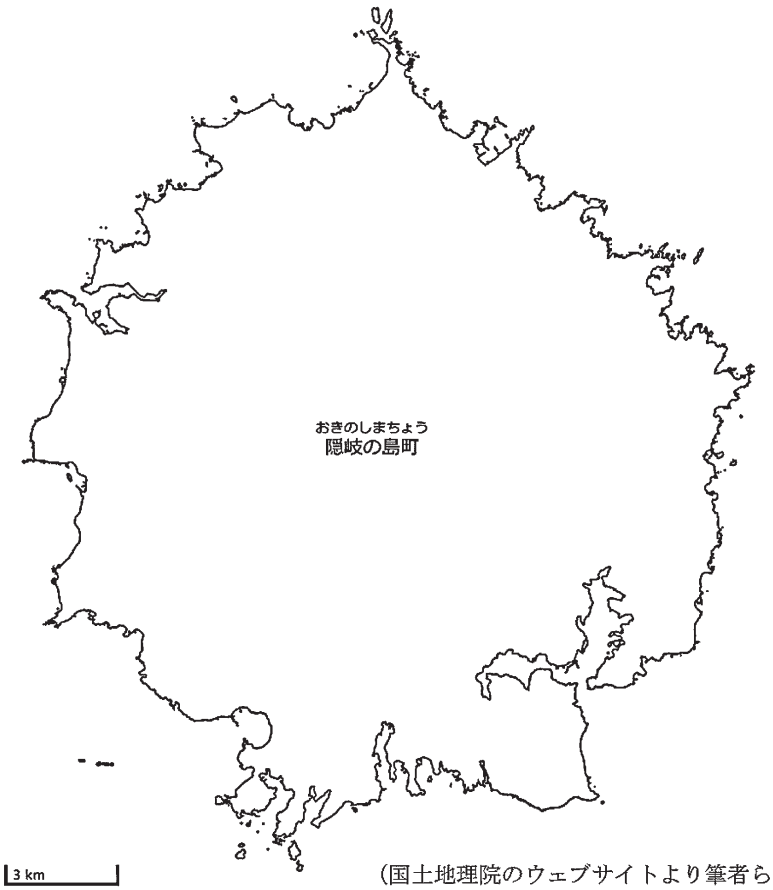
本稿の構成は以下の通りである。第2章では、隠岐の島町を取り巻く現状の観察を通して、都市部と比較すると、そこには人的資源にアクセスする際の格差や教育機会を選択する際の格差といった機会格差があることを確認する。また、本活動を支える理論的な枠組みであるソーシャル・キャピタル論（Putnam 2000＝2006、堤 2011、Claridge 2018、埴淵（編） 2018）を中心に、関連するものとしてよそ者の理論（敷田 2005、2009）とまちづくりラウンドテーブル（久 n.d.）を概観する。さらに、隠岐の島町の住民の視点についても確認する。第3章では、前章で導入した理論および住民の思いを押さえた上で、隠岐の島町のあるべき理想像を提示してそれに沿った展開プランを提案した後に、2019年度に実際に行った活動について紹介する。第4章では、それらの活動で得られた成果を考察して、今後の活動に生かせる部分や住民に与えつつある影響、そして理論にフィードバックを与えられそうな点を指摘する。第5章は、本稿のまとめおよび今後の展望である。

2 先行研究概観

本章では、2.1節で、隠岐の島町の地理的情報や統計値、観光資源、その他先行研究を概観することにより、当該地域の現在に迫る。そして、隠岐の島町の現状を踏まえた上で、2.2節において、筆者らが活動を行うにあたって拠り所とする理論であるソーシャル・キャピタル論に加えて、よそ者論、まちづくりラウンドテーブル論を提示する。さらに、2.3節では、隠岐の島町の住民の視点からの話を確認する。

2.1 隠岐の島町の現状

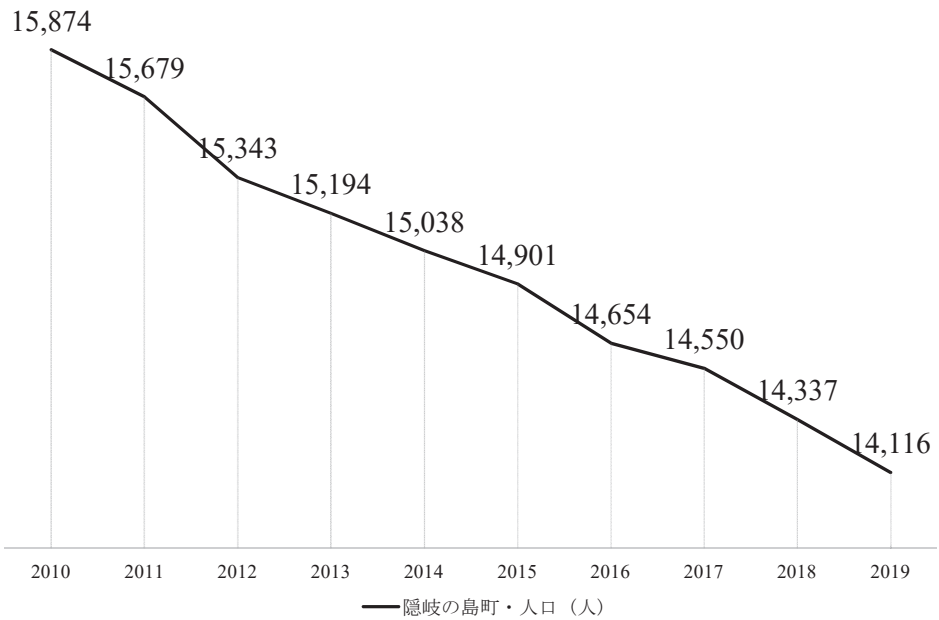
隠岐の島町が位置する島後は、本土の島根半島から北東約80kmの日本海上に位置にしており、隠岐諸島中最大の島である。島の外周は約151km、面積は約242km²であり、面積の約80%を森林が占める。図1は隠岐の島町の地図である。また、隠岐の島町の北西約158kmのところには竹島がある[4)]。



（国土地理院のウェブサイトより筆者ら作成）

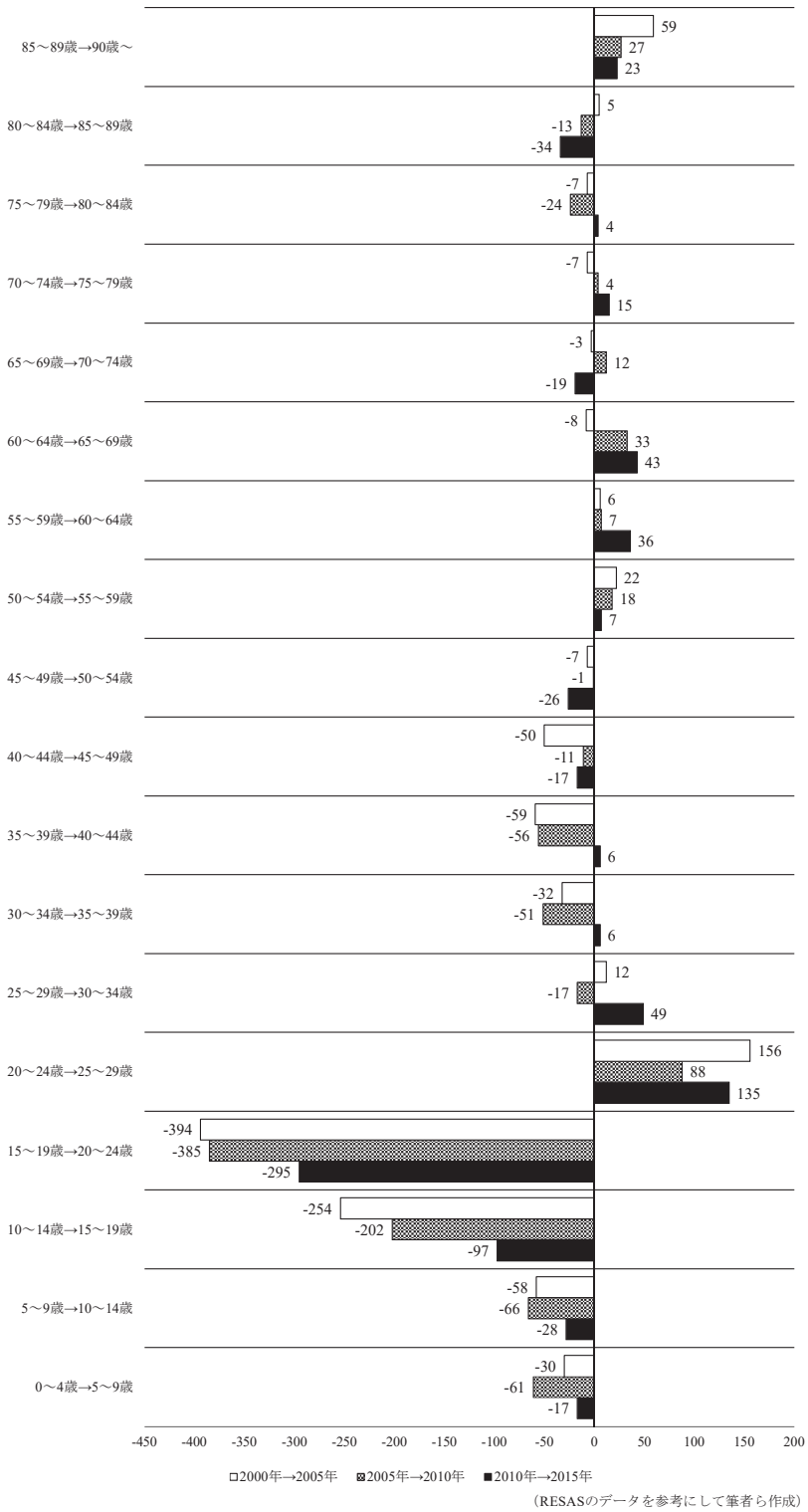
図1：隠岐の島町の地図[5)]

隠岐の島町の人口に関しては、1955年（昭和30年）の28,353人をピークに年々減少し続けており、2010年（平成22年）4月1日現在で15,874人、2015年（平成27年）4月1日現在で14,901人、2019年（平成31年）4月1日現在で14,116人である（隠岐の島町2017、隠岐の島町役場総務課広報広聴係2010、2015、2019）。図2は、2010年から2019年までの人口推移を示している。また、図3を見ると、とりわけ若年層人口の流出が顕著であり、高校生の年代の若者（15～19歳）が就職したり大学に進学したりする頃（20～24歳）になると島を出ていくという傾向が強くなっていることがわかる。さらに、2019年（平成31年）4月1日時点で、65歳以上の人口は5,658人であり、高齢化率は40.1%となっている（隠岐の島町役場総務課広報広聴係2019）。2020年（令和2年）には高齢化率が42%になるという予測も出ている[6)]。



（隠岐の島町役場総務課広報広聴係（2010-2019）を参考にして筆者ら作成）

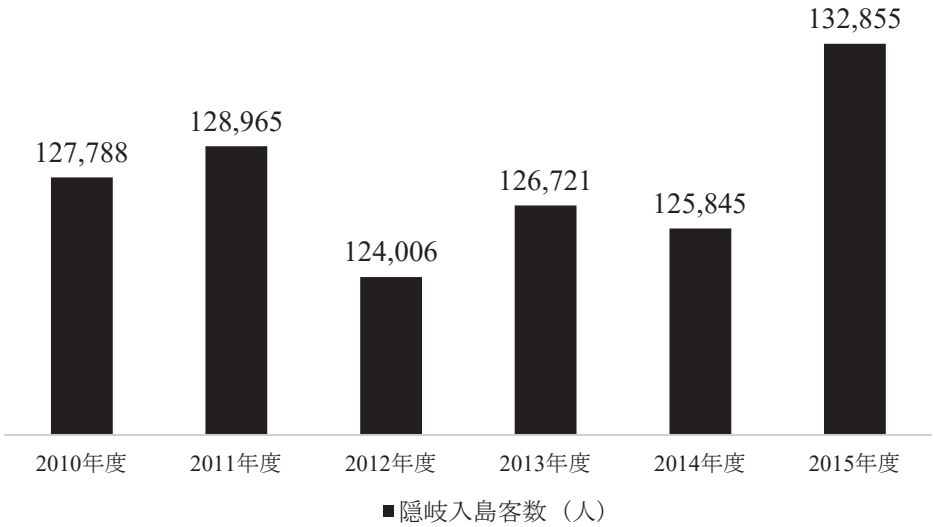
図2：2010年～2019年の隠岐の島町の人口推移[7)]



（RESASのデータを参考にして筆者ら作成）

図3：隠岐の島町における年齢階級別純移動数の時系列推移（人）[8)]

人口減少のただ中にある隠岐の島町ではあるものの、観光客が毎年12万人近くいることは注目に値する。図4は、近年の観光客数の推移を示している。



（隠岐の島町（2017）を参考にして筆者ら作成）

図4：隠岐の島町への観光客数の推移[9)]

観光客が一定数いることの理由の一つとして、隠岐は観光資源が豊富であることが挙げられる。野辺（2014）によると、隠岐には、日本海の形成過程や日本列島の成り立ちを知るための地質現象が残されており、北海道等で見られる北方系の植物や沖縄で確認される南方系の植物、標高2000m以上の山地に生える亜高山帯の植物、朝鮮半島やウラジオストク等に広がる大陸性の植物が共存する。また、日本国内では無くなってしまった古いタイプの祭りや大陸の影響を受けたように見える芸能および巨岩・巨木信仰が今日まで受け継がれ、また歴史的には黒曜石を他地域へと運搬する過程で生じる人・文化交流がもたらされる場でもあった。すなわち、隠岐は「大地の成り立ち」「独自の生態系」「人の営み」のつながりを有し、それらを一つの物語として伝える場なのである。これは、2013年に世界ジオパークに認定された大きな要因であるといえる。そして、ウェブサイト[10)]やガイドブック[11)]等で写真映えがする観光名所を押し出していることも、観光客数の確保につながっていると考えられる。さらに、大阪にある伊丹空港から隠岐空港まで飛行機を利用して1時間弱で到着する[12)]という利便性も影響しているだろう。

しかし、離島であるがゆえに、本土や都市部と比較してさまざまな機会格差が存在することは確かであり、それは若者の人口流出が顕著であることに表れている。大阪大学文学部／大学院文学研究科人文地理学教室（2018）によると、町立中学校を卒業した生徒のおよそ2割は高校進学のために県内

外を問わず島外に流出している。人口、特に若者の人口が流出すると、地域の担い手の数が減少することになって、活気は無くなり、社会課題の解決が滞るどころか、社会課題が増大することにもつながりかねない。若者が地域にとって活力になることは、同じ隠岐諸島にある海士町の事例を見ても明白なことである[13)]。

2.2　理論的枠組み

前節からわかったことは、隠岐の島町には第1章で述べた多様な機会が十分にあるとは言い難いということである。それでは、そのような機会を増やしていくためにはどうすればよいのだろうか。この課題に取り組むために筆者らがまず注目したのは「ソーシャル・キャピタル（Social Capital、社会関係資本）」[14)]である。ソーシャル・キャピタルは、社会関係における信頼や規範、紐帯、ネットワークなどを「資本」として位置づけようとする概念である（堤2011）。また、その代表的な提唱者であるPutnam（2000: 18-19＝2006: 14）は「（...）社会関係資本論において中核となるアイデアは、社会的ネットワークが価値を持つ、ということにある（... the core idea of social capital theory is that social networks have value）」とした上で、「（...）社会関係資本が指し示しているのは個人間のつながり、すなわち社会的ネットワーク、およびそこから生じる互酬性と信頼性の規範である（... social capital refers to connections among individuals – social networks and the norms of reciprocity and trustworthiness that arise from them）」（同上）と述べている。端的にまとめると、ソーシャル・キャピタルとは、人と人とのつながりの諸側面を指す概念であるといえる。そして、それが豊かである地域は、協力関係を促進させ、効率のよい社会になっていく（Putnam 2000＝2006）。

また、Putnamはソーシャル・キャピタルを大きく二つに区分した。一つは結束型（bonding）ソーシャル・キャピタルであり、もう一つは橋渡し型（bridging）ソーシャル・キャピタルである。Claridge（2018）は両者について次のように説明する。結束型は、グループやコミュニティ内のつながりを示しており、人口統計上の特徴や心理的な態度の面、利用できる情報や資源において高い同質性があることによって特徴づけられる。一方で、橋渡し型は、人種や階級、宗教といった社会の分裂を越えた人々のつながりを示しており、まさに複数のグループやコミュニティの間の「架け橋」である。言い換えると、結束型は一つの組織内における人と人とのつながりのことであり、橋渡し型は組織間を越えた人と人とのつながりのことである。図5は両者の関係を図式化したものになる。結束型は、特定の互酬性を安定させ、連帯を動かしていくのに都合がよいのに対して、橋渡し型は、外部資源との連繋や情報伝搬において優れており、より広いアイデンティティや互酬性を生み出すことができる（Putnam 2000＝2006）。結束型は、社会経済的な困難や不健康に苦しんでいるといった、恵まれていない人々にとっては重要な支えとなるが（Putnam 2000＝2006、Claridge 2018）、極度に組織化されたり排他的になったりする面もある（Claridge 2018）。また、橋渡し型は、情報を得て新たな機会を認識する能力の増進に結びつき、自分とは異なる人々や価値、信念を受け入れることにもなる上に、異なるグループ間でアイデアやイノベーションを共有・交換することを可能にする。結束型に比べて人と人とのつながりは弱くなるかもしれない

が、これらのメリットを考えると、むしろその弱さが橋渡し型の強さにつながっているといえるだろう。ただし、ここで注意しておきたいのは、結束型と橋渡し型の間に優位性があるわけではなく、両者のバランスを考えるのが重要だということである（Claridge 2018）[15]。

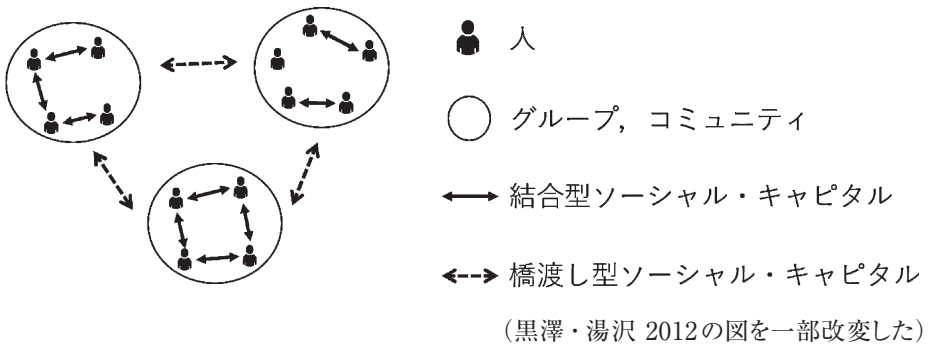


図5：結束型ソーシャル・キャピタルと橋渡し型ソーシャル・キャピタル

次に、上記のソーシャル・キャピタル論に関連するものとして、よそ者の理論、特によそ者効果について説明する。「よそ者」ということばとその存在は、一般的に、自分たちとの区別を意識した差を含んでおり、それが行き過ぎると差別につながってしまうために、好意的に捉えられるものではないのだが、最近のまちづくりにおいてはその役割が積極的に評価されるようになってきている（敷田 2005）。まちづくりの分野以外にも民俗学や社会学などの研究者が注目してきた概念であるが、それらに共通するのは「移動や漂泊することであり、主に外部から内部に入って認識される存在」（敷田 2009：83）である。敷田（2009）はまちづくりにおけるよそ者の特性を分析しており、以下の5つの「よそ者効果」を挙げている。1つ目は「地域の再発見効果」である。地域に不慣れなよそ者が異なる視点から評価をすることで、その地域の住民が気づいていない地域のよさを発見できるとしている。2つ目は「誇りの涵養効果」である。自意識は誇りにつながるものの、その形成には他者による評価や褒めが必要である。よそ者が普段接することのない地域の事象に接し、その価値を評価し、その地域の住民と十分にコミュニケーションをして価値を伝えるには時間がかかる。この時間の長さが、1つ目の効果とは異なる点である。3つ目は、よそ者が地域にない知識や技能を持ち込む「知識移転効果」である。時代が進むにつれて必要となる知識・技術は変わっていく。地域は必ずしもその変化についていけるわけではなく、よそ者が助けになる場合がある。4つ目は「地域の変容を促進する効果」である。よそ者の異質性は、地域に驚きや気づきをもたらし、地域が有する資源や知識を変化させていく。最後の5つ目は、よそ者が持つ「地域とのしがらみのない立場からの解決案」の提案である。そのような立場だからこそ、よそ者は優れた解決策を提案できるとしている。これらの効果は、ソーシャル・キャピタル論における橋渡し型に絡むものであるといえるだろう。

また、橋渡し型ソーシャル・キャピタルであれ、よそ者効果であれ、適切な場がなければその機能を

十分に果たせるとは言い難い。そこで、久（n.d.）のいうところのまちづくりラウンドテーブルについて紹介しておきたい。まちづくりラウンドテーブルは、組織ではなく「場」であり、その特徴には、（1）地域の課題を解決しようと意気込むというよりも、うまく機能すればモウケモノという軽い気持ちで行う、（2）参加者は自由に発言し、結論を出す必要はない、（3）自らの意思で集まる人に期待する、有志による参加方式である、（4）やりたいことをやりたい人同士で共有して行う（この指とまれ方式）、（5）人集めもみんなで分担して行う、などがある。これらの特徴からは、動きや変化をゆっくりと醸成していくことが意識されていると推察できる。

筆者らが関わり始めた隠岐の島町において、どのように場をつくり、機会をつくっていくべきなのか。上述の諸理論はそのプランを考える上で重要な示唆があるといえる。

2.3　隠岐の島町の住民の視点から

大阪大学文学部／大学院文学研究科人文地理学教室（2015）によると、高等教育機関のない隠岐の島町[16]では、大学・専門学校進学者の島外流出を止めることはできないため、島外の大学等を卒業した後に再び島へ戻ってきてもらうことや、高校卒業後に島内で就職してもらうことに行政は注力している。インターネットで検索すると、隠岐の島町の特徴や概要、Uターン・Iターン支援施策をまとめたウェブサイトや暮らしの体験談をまとめたウェブサイトが見つかる[17]。また、地元の人々によると、2019年は島内の中学校の卒業生のうち島外の高校に進学した人が3割を超えたとのことである。同町にある島根県立隠岐高等学校（以下、隠岐高校と示す）は、県外から生徒を募集したり、住民の孫を本土から隠岐に「留学」させる試みである「グラチルターン」を推進したりしている[18]。また、前掲書では、「隠岐は冬場の観光資源に乏しく気象条件も厳しいが、観光客は年間を通じて訪れることが望ましい」（p. 57）ということが課題として述べられている。もちろん、住民の視点からの語りは他にもあるのだが、紙面の都合上、すべてを掲載することは残念ながらできない。しかし、上記の例を見ただけでも、隠岐の島町において、人と人のつながりが希求されていることは感じ取られる。

3　提案および実践（活動報告）

本章では、第2章で確認した隠岐の島町の現状、理論的枠組み、および住民の視点をもとに、まずは隠岐の島町のあるべき理想像を描く。そして、その理想像に到達するための提案を述べた後に、実際に行った活動を紹介する。

3.1　理想像の設定および提案

第2章から、課題となるテーマは人口減少や過疎にまつわる問題、観光客の増加および活用方法、

地域への漠然とした不満など多岐に及ぶことがわかる。その一方で、それらの課題に対して、受け身的に不満を述べる場面が多く見受けられた。このように先行研究の精査および本活動を行うための事前調査としての住民との対話を重ねるうちに、確かにひとつひとつの課題を解決することは必要ではあるものの、主体的に地域に関わる姿勢や地域内での建設的な議論を醸成できるような、それらの課題を解決するための必要な基盤を作る活動こそが大切であり、その遂行が先決であるという仮説を立てた。つまり、まずはまちづくりラウンドテーブル（久 n.d.）を何らかの形で作り上げることが重要だということである。そこで、理想状態の設定とそこに至るまでのマイルストーンに関して、全体的な地域の活力の向上（第1段階）、個々の地域課題に対してより厚みのある対策の実行（第2段階）、持続的に課題が解決され、新しいことや面白いアイデアが生み出されていく（第3段階）という流れにして、第3段階を理想状態に設定した（図6を参照）。

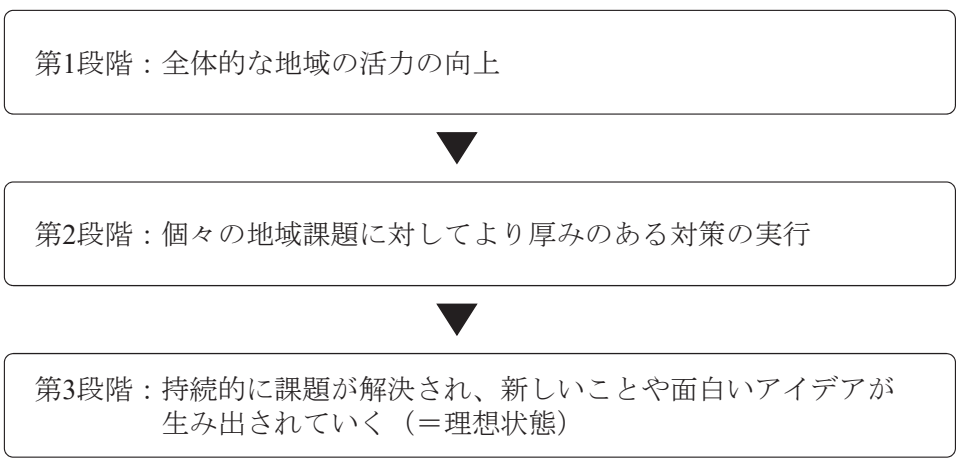


図6：理想状態とそこまでのロードマップ

この理想状態が実現されることで、地域は、今後直面するであろう社会課題に対して柔軟に対応できるようになる。また、やりたいことはあるが、まだ実現できていない人たちが一歩踏み出せる場として活用できる。今やりたいことがなくても、新たな活動のためのインスピレーションを得るきっかけが生まれる場でもあり、多様な人材が交流し、新しいものが生まれるクリエイティブな場でもある。図6のような実現過程において、よそ者が関わってくることは多分にあるだろう[19)]。そして、第3段階の理想状態は、新たな情報を得ながら柔軟に物事をうまく進行させることができるという点で、結束型ソーシャル・キャピタルと橋渡し型ソーシャル・キャピタルの均衡が適切にとれている状態であるともいえよう。ここでは、よそ者とその地域の関係もうまく機能していると予想される。

この理想状態への道筋を前提として、まずは第1段階を目指して、2019年度に筆者らが主体となって行うべきプランを以下のように提案した。(1) 高校生と大学院生との接点となるイベントの開催と、(2) まちの「居場所」としてのまちづくりラウンドテーブルの設置、(3) 高校と大学の合同研究発表会の実

施である。(1) に関しては、離島地域の高校生に対して身近な存在ではない大学院生との接点を構築することによる機会格差の是正とともに、大学院生として地域に関わることや超域プログラムの性質である多様なバックグラウンドを持つ大学院生が集まることの利点の確認を目的とする。また、高校生への身近なキャリアモデルの一例になること、および、自分たちの強みや地域に関わり続ける意義を発見できることも期待される。(2) については、地域の活力を生む起爆剤になるとともに、地域の個別課題の解決へ向けた活動のプラットフォームを形成することが目的である。地域での課題解決の活動拠点の一つとして機能し得る本活動をきっかけとして、様々なレベルでの課題解決活動が展開され、活動を通して島内外の人々と交流して人的ネットワークが密になることも見込まれる。さらに、(3) に関しては、高校と大学がお互いの研究内容を紹介し合い、高校生にとってモデルとなるような研究発表を大学院生が行うという目的がある。

3.2　実践（活動報告）

前節での提案を実行に移し始めたのは2019年9月からである。活動日程の一覧を表1に示しておく。本節では、(1) 質問会、(2) ワークショップ、(3) 合同発表会・座談会、(4) 島内外のボランティアによって学びの場を提供する、中学生対象の学習塾「隠岐塾」の開催の4項目に分けて詳しく説明する。

表1：活動の日程

日程	活動内容
2019年　9月19日	高校生から大学院生への質問会の開催 （島根県立隠岐高等学校）
2019年11月20日	「このまちの明日を語るworkshop vol. 0」の開催 （京見屋分店）
2019年12月　7日	「このまちの明日を語るworkshop vol. 1」の開催 （京見屋分店）
2019年12月19日	隠岐高校と大阪大学の合同研究発表会・座談会 「この町の今と未来を語ろう」の開催（隠岐島文化会館）
2019年12月28日～ 2019年12月30日、 2020年　1月　4日～ 2020年　1月　6日	中学生対象の学習塾「隠岐塾」の開催[20)] （隠岐の島町学生等宿泊研修施設（のぎのびハウス））
2020年　1月31日	2月の隠岐塾の打ち合わせ （京見屋分店）

3.2.1　高校生から大学院生への質問会

2019年9月19日、隠岐高校の図書室にて、放課後の時間帯に、高校生から大学院生への質問会を開催した。参加した高校生は8名であり、その内訳は3年生が4名、2年生が3名、1年生が1名で

あった。大学院生側から自己紹介および各々の研究内容の簡単な説明を行った後に、高校生に中サイズの付箋とペンを配布して、大学院生に対して質問したいことを付箋1枚につき1つ綴る形式で好きなだけ書いてもらい、それらを前のホワイトボードに貼り出していって、似たような内容が書かれた付箋をグループ分けしつつ、質問に適宜回答していくという流れで進めた。写真1はその時の様子である。

写真1：高校での質問会の様子

この時に高校生から出た質問は、表2にまとめている。大学受験を控えた3年生がいたので、進路選択や受験勉強に関する質問が多く出るのではないかと予想していたが、実際のところは高校と大学の違いに関わる質問の数が多かったことが特徴的であった。なお、表2に記載した質問への返事をすべて記述することは紙幅の都合上できないため、代表的なものを挙げておく。例えば、「効率のよい勉強法を知りたい」という質問に対しては、「同じものを反復して行うことが大切だ」や「ある記述や解法に対して『なぜこうなるのか?』という疑問を常に抱いて、理由を調べたり自分なりに考えたりしていくと記憶に残りやすくなる」という内容を大学院生自らの体験に基づいて示した。また、「生活面で特に大変なことは何か」という質問には、「奨学金やアルバイトで生活費を賄っている」と回答した。

表2：高校生からの質問（2019年9月19日）[21)]

【進路選択に関する質問】 ● 将来の夢は何か。 ● 将来どうするのかは決まっているのか。 ● どうして大阪大学に進学しようと思ったのか。 ● 新たにチャレンジしてみたいこと。
【高校時代に関する質問】 ● どんな高校生活をしていたか。 ● 高校でやっておくべきこと。 ● バレーのポジションはどこか。

【大学受験に関する質問】
- 受験期のリフレッシュ法。
- 模試・センターでの点の取り方。
- 受験勉強の仕方。
- 効率のよい勉強法を知りたい。
- 高校時代どれくらい勉強していたか。

【高校と大学の違いに関する質問】
- 高校と大学の授業の違いを教えてほしい。
- 高校にはないような部活やサークルはあるか。
- 大学内に留学している人はどれくらいいるのか。
- 大学での勉強面や生活面で特に大変なことは何か。
- バイトはしているか。
- 何のバイトをしているか。
- 一人暮らしで大変なこと。
- 自炊をしているか。
- 研究は趣味の一環か、それとも課題か。
- 研究をどうして始めようと思ったか。
- 勉強以外に取り組んでいる活動。
- 1日何時間勉強しているか（平日・休日）。
- 普段の勉強時間。
- 普段どれくらい本を読むか。
- 休日の過ごし方。
- 1日の自由時間。
- 生活の流れ。
- 寮や家に帰った後のスケジュール。
- 今は楽しいのか。
- 娯楽はあるのか。

3.2.2　ワークショップの定期開催

まちの「居場所」としてのラウンドテーブルを用意するために、ワークショップの開催を計画し、2019年11月20日に「このまちの明日を語るworkshop vol.0」を試験的に行った。昭和25年より営業されている京見屋分店（ブンテン）[22]の1階において、大きなテーブルを囲みながら、ブンテンの主（あるじ）や住民、Iターン住民、筆者ら大学院生、観光客らがビールや飲み物を片手にアイデアを出したり情報交換をしたりした。この場に集まった人々は、ブンテンの主が直接声をかけて誘った人々である。筆者らがファシリテーターを務め、出た意見を可視化するために、付箋に適宜まとめて、テーブル上の大判紙に貼り付けていった。写真2はワークショップ当日の様子である。試験的な実施であり、かつ筆者らにワークショップ運営の不慣れさはあったものの、写真2の卓上の付箋数からもわかるように、たくさんの意見が出された。約2時間のワークショップであったが、話の流れが一度も途切れることがなかったのが特徴的であった。

写真2：「このまちの明日を語るworkshop vol.0」の様子

この初回のワークショップをもとに、2019年12月7日には「このまちの明日を語るworkshop vol. 1」を開催し、月1回のペースで本格的にワークショップを継続していく流れとなっている。毎回のワークショップで出される意見は一覧で見られるようにデータ化して、参加者に了承を得た上でビデオカメラやボイスレコーダー等でも記録を取り、次のワークショップ時にそれらの内容をまとめたものを反映させたプリントを配布することにしている。また、議論された内容は模造紙に整理した後に掲示して（写真3を参照）、誰でもアクセスできる（内容を見て、コメント・感想を書き込める）ようにしていく。

さらに、これらのワークショップで出た案の一部が実現化される方向にも進んでいる。これについては、3.2.4節で詳述する。

写真3：「このまちの明日を語るworkshop vol.0」で出された意見の掲示

3.2.3　隠岐高校と大阪大学の合同研究発表会・座談会

2019年12月19日には、隠岐高校と大阪大学が合同となり、「この町の今と未来を語ろう」というタイトルのもと、研究発表会および座談会を開催した。主な参加者は、隠岐高校の1、2年生と大阪大学の大学院生である筆者ら、その他の関係者や住民の方々である。写真4に、当会の宣伝用画像を縮小したものを示す。

写真4：合同研究発表会・座談会の宣伝用画像

研究発表会では、高校側のジオパーク研究[23]という授業の一環としての2年生代表2グループによる研究の壇上発表、筆者らの隠岐の島町を対象とした研究成果の壇上発表、2年生による別会場での発表、大阪大学の堤教授による6年間の隠岐の島町調査の研究成果の発表を通して、高校生と大学院生がお互いに学びを深め合うとともに、大学院生が高校生にとっての見本となるような発表を行うことで、高校生が目指すべき一つのモデルとなるように振舞った。また、座談会では、隠岐の島町の副町長や住民の代表、高校生の代表、大学院生の代表、大学の教授が一緒に登壇して意見交換を行った。

3.2.4　中学生対象の学習塾「隠岐塾」の開催

3.2.2節で取り上げたワークショップにおいて、島には一般的な学習塾[24]がなく、塾を運営したいという案が出ていた。そこで、ワークショップで出された案の実現化の第一弾として、ワークショップに参加していた住民の有志が中心となって他の住民も巻き込みつつ、筆者らも加わった島内外のボランティア8名によって、2019年12月28日～12月30日および2020年1月4日～1月6日（各日18：00～21：00）の日程で、中学生を対象にした、学びの場を形成するための学習塾を試験的に運営することになった。日に

よってばらつきはあったものの、参加した中学生は合計15名である。写真5は、その時の様子である。

写真5：隠岐塾の初日の様子

隠岐塾の内容は、中学生への学習支援がメインとなっている。また、3.2.1節で紹介した高校生から大学院生への質問会の目的とも重なる部分があるが[25]、島内の中学生にとって身近な存在ではない大学院生の実態をイメージできるように、塾を進行するにあたって、勉強時間だけでなく、筆者ら大学院生への質問コーナーも所々に取り入れた。以下の表3は、開催初日に中学生から出た質問をまとめたものである。

表3：中学生からの質問（2019年12月28日）[26]

【これからのことに関する質問】 ● 勉強を頑張ると何かいいことがあるか。 ● 将来のことを考えるきっかけになった出来事はあるか。 ● 憧れの人はいるか。 ● 頑張ったか。
【中学校時代に関する質問】 ● 1日どれくらい勉強していたか（中学生の時）。 ● 1日何時間勉強したか。 ● どんな中学校生活を送ったか。 ● 中学の時に頑張ったことは何か。 ● 中学の時の夢は何だったか。 ● 上手くなるサーブ方法とは。 ● バレーは上手かったか。
【勉強方法に関する質問】 ● 国語の文章問題に強くなる方法はあるか。 ● 覚えるのが難しい。 ● 社会や理科の受験勉強は、どんなことをしていたか。 ● 勉強が楽しくなるコツはあるか。 ● 頑張り方を教えてほしい。

【中学校と大学の違いに関する質問】
- 1日どのくらい勉強したか／しているか。
- 1日どれくらい勉強をしているか。
- 1日、何時間勉強しているか。
- 平日はどのくらい勉強をしているか。
- 授業は1日に何回受けるのか。
- 1回の授業は何分間か。
- 週に何回学校に行くか。
- どのくらいの広さか。
- 大学は遊ぶものだと大人が言うが、それは本当か。
- 学校は楽しいか。
- ゲームはするのか。
- 1日にテレビはどのくらい見ているか。
- 大学が最高に楽しい瞬間はいつか。

回答コメントをいくつか取り上げてみると、「大学は遊ぶものだと大人が言うが、それは本当か」という質問に対しては「本当です。しかし、ここでいう『遊ぶ』の定義とは自発的に行うすべてのことです。自由時間が多いので興味のあることは何でもやってみろということです」と回答し、「将来のことを考えるきっかけになった出来事はあるか」という質問に対しては「小学校高学年の時に、夏休みに開かれた小学校の水泳教室で、担当してくれた先生が親身になって泳ぎの指導をしてくれたことです。過去に水のトラウマがあってうまく泳げない状態が続いていたのですが、あきらめずに、まるで自分事のように指導してくれて、初めて25m泳ぎ切った時に一緒に喜んでくれたことが嬉しくて、『こんな先生になりたい!』と思うようになりました」と回答した。

今回の経験を踏まえながら、今後も住民の方々とともに隠岐塾を開催することを検討している。筆者らが開催したワークショップでのアイデアが具現化して、筆者らが関わりつつも住民主体の動きが展開されてきている。

4 考察

本活動を通して、筆者らは、地域での課題を汲み取り、実践につなげるという活動に一貫して取り組むことができた。本章では第1章で導入した「大学院生による、お互いの専門分野を超えたまちづくりにはどのような意義があるのか」という問いに対して、第3章で紹介した活動報告も踏まえながら、(1) 専門分野と社会の統合、(2) 大学院生が超域プログラムのコースワーク内プロジェクトとして活動を行う意義とインパクト、という2つの視点から見ていくことにする。さらに、本活動に対する隠岐の島町の住民の感想や、本活動と第2章で導入した理論部分との兼ね合いについても言及する。

まずは、(1) 専門分野と社会の統合という視点である。このプロジェクトは、超域プログラムのコースワークの一環として実施されており、第1章でも述べたように、様々な専門分野の学生の協働による課

題解決を目的としている。本活動においても、表4に示すような、多様な専門性が混じり合っている。

表4：各メンバーの専門性と地域テーマとの親和性の移り変わり

メンバー	各自の専門における キーワード	地域テーマとの 親和性（初期）	中学生や高校生との 親和性	地域テーマとの 親和性（最終）
A	建築、まちづくり、 住居学	高	低	高
B	認知言語学、意味論、 英語学、（教職）	低	高	高
C	地球物理学、天文力学、 地学	不参加	高	低
D	材料工学、金属精錬、 界面熱力学	低	不参加	低
E	教育社会学、数学、 情報、（教職）	高	不参加	高

まちづくり活動において、これらの専門性はいかに発揮されてきたのだろうか。また、他分野の研究者がまちづくり活動に関わる意義とは何であろうか。本活動では、すでに隠岐の島町との関わりがあり、大学でもまちづくりについて学んでいるAが本活動で設定した課題との親和性が高いことに加えて、ワークショップにおいて主要なテーマとして扱われた教育についての専門であるEも課題との親和性が高いと考えられる。一方で、言語学の研究を行うB、物理・地学系研究を専門にするC、工学系材料を研究するDは、自らの専門性と課題との間には距離があると考えていた。そのため、本活動の初期は、A（とE）が主に活動を牽引して、他のメンバーがサポートをするという形でプロジェクトが進められた。しかし、プロジェクトが進むにつれて、新たな視点が出てきたことにより、メンバーの立ち位置が変化することになった。中学生対象の学習塾「隠岐塾」（3.2.4節を参照）の開催時におけるメンバーの立ち位置に関しては、運営面で専門性に差は生まれないものの、講師として中学生に教える場合、英語が専門で教員免許を持っているBがもっとも親和性が高く、地学（中学校理科）に馴染みのあるCも活躍した。一方で、建築が専門であるAは定期試験や高校受験に関するテーマとは相性が悪かったようである。ちなみに、DとEは都合が合わず、塾の活動には不参加であった。また、ワークショップの開催に関しても、Aが主にファシリテーターを担うことには変わりがないものの、Bが言語表現の使われ方や会話の流れ、意味の形成などの分析を通したワークショップ研究の試みへと、本活動を自身の専門分野に引き寄せたことから、現在はAとBが活動を引っ張る形になっている。もちろん、個人の資質が関わっていることも想定されるため、一概に専門性の距離だけで議論できるものではないだろうが、各メンバーの専門性と課題の親和性は流動的であり、とりわけ本活動のような分野を超えた総合的な活動の場合、専門性によるメンバーの役割は多様化していく。上記の例から、専門分野と課題とを関連づける「超

域性」には、その両者の間の適当な距離感覚が必要であると考えられる。また、言語学の方法論は地理的な制約を受けにくく、研究分野として汎用性があるという点も影響した可能性がある。

次は、(2) 大学院生が超域プログラムのコースワーク内プロジェクトとして活動を行う意義とインパクトの観点である。本活動は、超域プログラムの一環として行われているものではあるが、地域に関わる実践的活動である以上、成果が求められる活動だと考えられる。本活動の一つの成果は、フィールドワークやワークショップの開催を通して地域住民との関係性が徐々に構築されていき、ワークショップで発せられたアイデアや住民の方々との協働によって「隠岐塾」という団体が形成されたことである。また、本活動の中で、特に中学生や高校生との接点について考えてみると、大学院生各々の専門性というよりは、大学院生という属性の当該地域における希少性の方が、特異な働きを見せていることが特徴的であった。現役の大学院生である筆者らが大学生活や将来について生の声で語ることが、塾を運営する地元の人々からは求められたのである。上記 (1) のような専門性や知識を有していることではなく、島内ではあまり見られないキャリアモデルの一例である大学院生という身分、および現在進行形で活動しているという状態が重視されており、この役割は各々の専門性に関係なく期待されるものであった。しかしながら、そのような状況において専門分野を超えて活動したからこそ、大学院生の多様なキャリアモデルを示すことにつながったのではないかとも考えられる。

また、本活動を行っていく中で、住民の感想も次第に聞こえてくるようになった。ワークショップの参加者からは、「様々な職種、年齢の方が集まり、また、初対面の方もいらっしゃったんだけど、沈黙がなく、和気あいあいとしたムードの中、次々と話題が出た。よいムードで話が進む中、建設的な意見も多く出た。思いを語っておわり、ではなく、次につなげていけそうなことが具体的にあがってきたこともとてもよかった」「あの雰囲気はとても素敵でした」との声があった。新たなラウンドテーブルの形成に対して、充実していたという意見である。また、隠岐高校のウェブサイトには、合同研究発表会・座談会について、「(筆者ら注：大阪大学の発表は) アカデミックな内容で生徒たちにとっては少し難しかったようですが、今後の隠岐の発展を考える上で、学びの多い内容でした」と掲載されており[27]、高校生にとって新たな視点が提供できたようである[28]。

最後に、本活動について第2章で紹介した理論的な部分との関連を述べる。「まちづくりラウンドテーブル」を具現化したものとしてのワークショップを開催していく中で、毎回さまざまな立場の人が集まっている。そこには、隠岐の島町に住み続けている住民だけでなく、一時的に滞在している観光客も含まれており、特に後者については「よそ者効果」を検証できる。さらに、ワークショップだけでなく、中学生や高校生と筆者ら大学院生のつながりを生み出した質問会や合同研究発表会・座談会、島内外のボランティアによる学びの場を提供する隠岐塾を通して、ステークホルダー間のつながりはどのように変容したのかを「ソーシャル・キャピタル論」で捉え、本活動の事例からどのように理論へフィードバックできるのかを考察する余地も十分にある。上記に示した筆者らのメンバー間の関係性を付加した、隠岐の島町の人々のつながりの変容を検討することも可能であるだろう。

5 まとめと今後の展望

本活動は、地域の住民と大学院生との協働によるまちづくりとして、約1年間を通して行われた。筆者らが超域プログラムの授業や各自の研究活動でこれまでに学修してきた理論的枠組みを提供したり、住民の協力や実務的なフォローによって活動を進めてきたり、筆者ら自身の大学院生としてのあり方を見つめ直したり、活動で得た情報から理論へのフィードバック可能性を指摘したりしてきた。改めて述べると、ソーシャル・キャピタル論やよそ者効果、まちづくりラウンドテーブルの理論を用いながら、離島地域での高校生との接点づくり、地域課題解決のためのワークショップの開催、島根県立隠岐高等学校と大阪大学の合同研究発表会の実施、島内の中学生向けの学習塾の開催、などを実践した。

この活動は将来を見据えたものになっており、次年度以降も筆者らは活動を予定している。そこで、本稿の最後に、今年度の活動で出てきた課題と今後の展望を記すことにする。

今年度の活動に付随する課題について、(1) 持続性の観点、(2) 研究の発展の観点、(3) ワークショップの手法および運営の観点、(4) 活動の評価の観点という4つのポイントから指摘したい。

(1) に関しては、活動を持続していくために必要な資金に関連する経済的持続性と大学院生による活動であるがゆえに生じる人的資源に関する持続性の課題が挙げられる。前者に関しては、ワークショップの継続や隠岐塾の運営に関わる問題である。木下 (2009) は、無償でまちづくりに取り組むと、継続的な成果を上げていくことが困難な場合があり、可能な限り、少しずつでも報酬を支払う仕組みが整っている方が健全な事業運営ができると指摘している。また、後者の課題については、誰が主体となって活動を行い続けるのかに関わる問題である。持続性のあるシステムとして活動を計画していくことが今後の課題となってくるだろう。

(2) から言えるのは、本活動の目的は研究と実践をつなぐことであり、今後は地域の課題との関連性も考慮しつつ、効果的な研究へと発展させていく必要があるということである。例えば、各メンバーの専門性と地域課題との間で引き起こされる新たなるシナジーによる研究 (第4章も参照) や、地域課題を解決できる素地を作った上で新たな大学院生が参入していくための先駆けとなる授業を開発するという取り組みが考えられる。

(3) については、(1) や (2) と関連する部分もあるが、本活動の幹であるワークショップを持続させ、かつより有効なものに改善していくことは急務であり、研究としての展開可能性があるテーマにもなり得る。

(4) の観点における課題は、実践活動として進めてきた本活動ではあるが、活動のインパクトについては評価できておらず、その有効性を定量的に判断できていないことである。また、筆者らを含めた本活動に関わる中核メンバーによる各活動のプロセスやアウトカムへの批判的・建設的な評価は行われてはいるものの、活動を展開する行為そのものに関する評価はほとんど行われていない。活動1年目ということでそこまで問題はないと思われるが、今後活動を継続して展開するにあたっては評価軸が必要になってくるだろう。

そして、上記の諸課題の解消に取り組み、ワークショップの継続的な開催を通して、地域にある社会課題を解決するためのさらなる活動へと展開させていき、授業開発などを含めた研究活動へと発展させていくことが次年度以降の展望である。こうすることで、第3章で示した、課題解決が持続的に行われて新しいことや面白いアイデアが次々に創出されるという理想状態の実現を目指していきたい。

謝辞

本活動および研究の一部は、「大阪大学超域イノベーション博士課程プログラム2019年度自主活動支援（グループ型）」からの助成金によって実施されました。また、大阪大学社会ソリューションイニシアティブ（SSI）の基幹プロジェクト「社会課題を解決するためのコミュニケーション能力の開発」（研究代表者：山崎吾郎）に参加する中で行われた活動・研究でもあり、文部科学省「地域課題に対応するコミュニケーションの推進事業」からの支援を受けました。

隠岐の島町の住民の方々、隠岐の島町役場の舟木睦氏、京見屋分店の谷田晃氏・谷田一子氏、本活動のサポートメンバーである大阪大学工学研究科の佐伯直哉氏、また、大阪大学文学研究科の堤研二教授、大阪大学工学研究科の木多道宏教授、大阪大学COデザインセンターの山崎吾郎准教授と大谷洋介特任講師、その他多くの方々からご協力および有益なご助言をいただきましたことをここに感謝申し上げます。

なお、本稿は、2019年12月17日に大阪大学豊中キャンパスで開催された「第4回豊中地区研究交流会」でのポスター発表と2019年12月19日に隠岐島文化会館で開催された研究発表会・座談会「この町の今と未来を語ろう」での口頭発表、および2020年1月22日に大阪大学工学研究科の主催で行われた「社会課題とは、統合とは」でのポスター発表の内容をベースに論考化したものになります。発表内容に関して貴重なコメントをしていただいた方々にも感謝いたします。

註

1）本活動・研究に関して、大阪大学超域イノベーション博士課程プログラムの指導教員のもとで倫理面・人権面に十分配慮した上で調査を行った。また、開示すべき利益相反関連事項はない。

2）各種データや地方創生、地方支援の詳細情報については、内閣官房まち・ひと・しごと創生本部事務局（2017）を参照されたい。

3）プロジェクト学習（Project-Based Learning）は、実世界に関する解決すべき複雑な問題や問い、仮説を、プロジェクトとして解決・検証していく学習のことである。学生の自己主導型の学習デザイン、教師のファシリテーションのもと、問題や問い、仮説などの立て方、問題解決に関する思考力や協働学習等の能力や態度を身につけるものである。一方で、問題解決学習（Problem-Based Learning）は、実世界で直面する問題やシナリオの解決を通して、基礎と実世界とを繋ぐ知識の習得、問題解決に関する能力や態度等を身につける学習のことである。学習者に問題が与えら

れ、解決に必要な知識を見定め、その知識を学習し、それを活用して問題解決に取り組み、問題が解決できたか否かを評価するという構造を有する学習である（溝上 2016）。

4） 隠岐の島町役場のウェブサイト「島の概要」を参照した。
https://www.town.okinoshima.shimane.jp/www/contents/1430467658299/index.html
最終アクセス日：2020年1月17日

5） 国土地理院のウェブサイトより、筆者らが作成した。
https://maps.gsi.go.jp
最終アクセス日：2020年1月31日

6） RESAS地域経済分析システムのデータを参照の上、筆者らが作成したまとめである。
https://resas.go.jp
最終アクセス日：2020年1月18日

7） 数値については、各年4月1日現在のものである。なお、「住民基本台帳」に基づいたデータとなっている。

8） 註6に同じ。なお、総務省「国勢調査」と厚生労働省「都道府県別生命表」に基づきまち・ひと・しごと創生本部が作成したグラフがRESAS上には表示される。

9） 隠岐の島町（2017）では、入島客数は船・飛行機・チャーター便を利用した来客数の合計とされている。

10） Okikankou webをはじめとするウェブサイトを参照されたい。
https://oki-dougo.info
最終アクセス日：2020年1月29日

11） 隠岐観光協会が作成する『2019年度版総合ガイドブック隠岐楽OKIRAKU』がある。下記URLより参照可能である。
https://e-oki.net/okiraku2019
最終アクセス日：2020年1月29日

12） 2020年1月31日現在、日本航空（JAL）において、13：10伊丹発―14：00隠岐着の便と14：40隠岐発―15：20伊丹着の便が毎日運航されている。

13） 山内・岩本・田中（2015）では、島前にある海士町の島根県立隠岐島前高等学校での改革（隠岐島前高校魅力化プロジェクト）の詳細が紹介されている。「高校の存続は、地域の存続に直結する」（p. vi）ことを感じ、高校の魅力化へとつなげていくプロセスが描かれている。隠岐島前教育魅力化プロジェクトのウェブサイトも参照されたい。
http://miryokuka.dozen.ed.jp
最終アクセス日：2020年1月30日

14） 「社会関係資本」と訳すのがポイントである。「社会資本」の場合は、道路、交通機関、上下水道、電力・ガスなどの社会的インフラストラクチャーを指すことになる（宇沢 2000、堤 2011）。

15）しかしながら、このソーシャル・キャピタルをどのように測定するのかはしばしば議論になる。その動向についての詳細は、埴淵（編）（2018）を参照されたい。

16）ただし、隠岐の島町には島根大学生物資源科学部附属生物資源教育研究センター海洋生物科学部門（隠岐臨海実験所）があり、これは大学の一機関である。

17）公益財団法人ふるさと島根定住財団のウェブサイト「くらしまねっと」や、農・林・漁・畜産等従事人材育成・マッチング6次産業化事業のウェブサイト「田舎暮らしについてムリなく「学ぶ」「体験する」ための情報サイト　ゼロから始める田舎暮らし」などを参照されたい。

https://www.kurashimanet.jp/lifestyle/shimane/municipality/okinoshima.html

https://inaka-start.com/story

最終アクセス日：2020年1月30日

18）その詳細情報および広報チラシについては、隠岐の島町教育委員会のウェブサイト記事「島外生徒学習環境支援補助事業について」を参照されたい。

https://www.town.okinoshima.shimane.jp/www/sp/contents/1465888996604/index.html

最終アクセス日：2020年1月30日

19）そもそも、筆者らも「よそ者」といえる存在ではあるが、活動が進んでいくうちにその存在価値は変化していくと考えられる。この現象は考察の価値があるが、本稿においては取り上げない。

20）塾の運営や開催の準備は全日程をかけて協働して行っているが、筆者らが中学生に直接指導したのは前半の3日間だけである。

21）質問が読みやすくなるように、漢字に直す等を行い、表現を若干修正した。

22）京見屋分店は、お茶・うつわ・くらしの道具・おくりものなどを取り扱い、コミュニティスペースを設け、beer standやカフェも整備している「何でも屋」である。筆者らが隠岐の島町で活動する際の拠点としている場所でもある。地域の人々には、「ブンテン」の愛称で親しまれている。

http://kyomiyabunten.com

最終アクセス日：2020年1月30日

23）ジオパーク研究は、1学年2学期から2学年1学期の1年間を通して、隠岐の島町内の地域の素材を題材に、地域への愛着心を育みつつ、課題発見能力や情報発信能力を身に付ける取り組みである。具体的には、地域の資源について講話や現地調査等により情報収集をして、地域の課題について深く調べて解決していく。1学年末には中間報告会として、お世話になった方々に対して、調査内容等を報告する。そこで得られたアドバイスを2学年時で生かし、「高校生が地域に出来ること」をもとに課題解決の提案を8月の最終報告会で発表することになっている（島根県立隠岐高等学校 2018）。

24）学習塾とは、小学生、中学生、高校生などを対象として、常設の施設において、学校教育の補習教育又は学習指導を行う事業所（校舎、教室）である（経済産業省大臣官房調査統計グループ 2019: 8）。

25）中学生の質問と高校生の質問の違いを考察したり、質問への回答を受けて中学生と高校生の考えがどのように影響されたのかを調査したりすることも興味深いが、本稿では取り上げない。

26）このリストの中には、質問コーナーの場に同席していた保護者からの意見も一部含まれている。また、質問が読みやすくなるように、漢字に直す等を行い、表現を若干修正した。

27）隠岐高校のウェブサイト記事「隠岐高校ジオパーク研究最終発表会」を参照されたい。
http://www.oki-hs.ed.jp/news/2019/001325.html
最終アクセス日：2020年1月30日

28）住民の発言や語りを記録して分析することで、新たに形成した場や機会の価値を検証できる可能性がある。例えば、田中ほか（2007）を参照されたい。

文献

Claridge, Tristan（2018）“Functions of social capital – bonding, bridging, linking.” *Social Capital Research,* 2018：1-7.

埴淵知哉（編）（2018）『社会関係資本の地域分析』ナカニシヤ出版.

久隆浩（n.d.）「まちづくりラウンドテーブルのすすめ」
http://www.voluntary.jp/img/u457/MI35145_060E.pdf
最終アクセス日：2019年12月15日

経済産業省大臣官房調査統計グループ（2019）『平成30年 特定サービス産業実態調査報告書 学習塾編』政府統計.

木下斉（2009）『まちづくりの「経営力」養成講座』学陽書房.

黒澤勇希・湯沢昭（2012）「まちづくりにおけるソーシャル・キャピタルの役割と効果に関する検討」第39回土木学会関東支部技術研究発表会（Ⅳ-4）.

松村悠子（2018）「長崎県対馬市・韓国釜山市を対象とした国境離島フィールド・スタディ」『Co*Design』3：87-96.

溝上慎一（2016）「アクティブラーニングとしてのPBL・探究的な学習の理論」溝上慎一・成田秀夫（編）『アクティブラーニングとしてのPBLと探究的な学習』東信堂：5-23.

内閣官房まち・ひと・しごと創生本部事務局（2017）「地方創生をめぐる現状と課題」
https://www.soumu.go.jp/main_content/000573278.pdf
最終アクセス日：2020年6月25日

野辺一寛（2014）「隠岐世界ジオパークの誕生～世界が認めた隠岐の魅力～」『地学教育と科学運動』73：5-6.

隠岐の島町（2017）『第2次隠岐の島町観光振興計画 ～人情がつむぐ「よかった。」があふれる島～』.

隠岐の島町役場総務課広報広聴係（2010）『広報隠岐の島』67.

隠岐の島町役場総務課広報広聴係（2011）『広報隠岐の島』79.

隠岐の島町役場総務課広報広聴係（2012）『広報隠岐の島』91.

隠岐の島町役場総務課広報広聴係（2013）『広報隠岐の島』103.

隠岐の島町役場総務課広報広聴係（2014）『広報隠岐の島』115.

隠岐の島町役場総務課広報広聴係（2015）『広報隠岐の島』127.

隠岐の島町役場総務課広報広聴係（2016）『広報隠岐の島』139.

隠岐の島町役場総務課広報広聴係（2017）『広報隠岐の島』151.

隠岐の島町役場総務課広報広聴係（2018）『広報隠岐の島』163.

隠岐の島町役場総務課広報広聴係（2019）『広報隠岐の島』175.

大阪大学文学部／大学院文学研究科人文地理学教室（2015）『隠岐の島の産業と生活（隠岐の島町調査報告）』1.

大阪大学文学部／大学院文学研究科人文地理学教室（2018）『隠岐の島の産業と生活（隠岐の島町調査報告）』4.

Putnam, Robert（2000）*Bowling alone: the collapse and revival of American community.* New York, London, Toronto, Sydney: Simon and Schuster. =（2006）柴内康文（訳）『孤独なボウリング　米国コミュニティの崩壊と再生』柏書房.

敷田麻美（2005）「よそ者と協働する地域づくりの可能性に関する研究」『江渟の久爾』50：74-85.

敷田麻実（2009）「よそ者と地域づくりにおけるその役割にかんする研究」『国際広報メディア・観光学ジャーナル』9：79-100.

島根県立隠岐高等学校（2018）『平成31年度入学生案内　拓　きみの伝説がここから始まる』.

田中康裕・鈴木毅・松原茂樹・奥俊信・木多道宏（2007）「コミュニティ・カフェにおける「開かれ」に関する考察：―主（あるじ）の発言の分析を通して―」『日本建築学会計画系論文集』614：113-120.

堤研二（2011）『人口減少・高齢化と生活環境　山間地域とソーシャル・キャピタルの事例に学ぶ』九州大学出版会.

宇沢弘文（2000）『社会的共通資本』岩波新書.

山内道雄・岩本悠・田中輝美（2015）『未来を変えた島の学校―隠岐島前発ふるさと再興への挑戦』岩波書店.

山崎吾郎・大杉卓三・大谷洋介・野々村英彦・藤田喜久雄（2016）「文理を超えて社会課題に挑むプロジェクト授業の展開：―大学院教育プログラムにおける協働的アプローチ―」『工学教育研究講演会講演論文集』64：102-103.

（投稿日：2020年1月31日）

（受理日：2020年7月9日）